

## 第1回時間学国際連携会議 報告書

日時：平成28年8月1日（月）14：00～17：30

会場：京都工芸繊維大学1号館3F会議室

出席者：シュタイネック・ラジ（国際時間学会（ISST）会長）

一川誠（日本時間学会会長）

藤沢健太（山口大学時間学研究所所長）

小山恵美（日本時間学会理事（京都工芸繊維大学））

細井浩志（日本時間学会理事（活水女子大学））

長谷川貴之（日本時間学会理事（富山高専））

右田裕規（山口大学時間学研究所）

記録：平田博子（山口大学時間学研究所）

議 題：国際時間学会 ISST との国際連携について

### 1. 小山恵美理事による Review 発表をした。

#### **Urgent Changes of Sleep-Wake Schedules in Japan and the Problems of Modern Light Environment; Cultural and Engineering Review of the Changes in this Millennium**

「時間学」における「光環境」の位置づけ一千年前と現代との比較から考察してきたこと一というタイトルで、現代社会の睡眠習慣激変と光環境の問題点を指摘した。シュタイネック会長からは、「他分野の研究も取り入れてオリジナリティがあり学際的研究だ」と総評され、「平安時代以降、鎌倉・室町時代の光環境と睡眠はどうだったのか、そのような研究はあるのか」との質問があった。これに対して細井理事が、文献や貴族の日記などから当時の情報が得られると説明し、小山理事が、当時は貴族だけが油を入手出来、夜起きていたこと、江戸時代になると、都市部では庶民でも油の入手が可能だったことを示唆すると、右田理事は都市部と地方の差を示し、近世の都市・農村の平均寿命の差への適用可能性について質問した。平安時代の貴族の就寝時間はかなり不規則だったと言う話や、延喜式は、むしろ奈良時代の役人の出勤状況を反映するものではないかと言う細井理事の解説を受けて、平安時代でも庶民は日の出・日の入りに左右されていたことが示されるなど、議論は大いに盛り上がった。小山理事から、深津正・著「燈用植物」に油の原料となる植物、抽出方法、火の熾しかた、油の使い方などが詳しく書かれていると補足があり、「時間学研究第9巻」特別寄稿（小山恵美）でも紹介していると報告があった。シュタイネック会長から「日本以外の、西洋や中国などの光環境と睡眠はどうだったのか」との質問があった。これについて出席者から

も活発な意見があり、経済史や照明工学の観点からも研究を進め、生活の中の時間がどのように推移していったのかを共同研究する提案がなされた。

## 2. 国際時間学会の活動について、シュタイネック会長より説明があった。

### ①ISST のミッション

- ・国際レベルでの各分野・専門における時間研究の振興
- ・多専門間における時間研究の相互紹介による相互理解の促進
- ・時間の学際的な研究、時間の総合理論の勧奨

### ②ISST の構造

- ・会員 約 110 人 内訳 北米 45% 欧州 45% その他 10% (2016 年時点・日本人 3 名)
- ・専門の内訳 人文 7 割 社会学・法学 2 割 その他 1 割
- ・理事会 (在任期間 3 年) 会長・副会長・会計幹事・書記・KronoScope 編集者・Study of Time 編集者・Time's News 編集者・理事 5 名

### ③ISST の主な活動についてシュタイネック会長より説明があった。

- ・国際時間学会大会 (3 年毎にこれまで 16 回開催) 今年のエジンバラ大学で 50 周年記念大会を開催した。次回開催地については候補地を検討中である。通常は大学以外の特別な場所を会場としている。これまで、ギリシャの小島にある地中海を望む正教教会のアカデミーでの開催や、コスタリカの山の中などスピリチュアルな背景のある場所で開催してきた。各回とも発表テーマを設けて、参加者は 100 名位。会期は 1 週間で、日曜日に集合し顔合わせ、月・火曜日は終日学会発表、水曜日は遠足、木・金も終日学会発表・土曜日はバンケットで終了する。参加者は皆一緒に食事をし、意見交換をする時間を大切にしている。学会のテーマは大会の 2 年前の理事会で決定し、発表の申し込みは 1 年前から、採択は大会テーマに沿っているかどうかを審査し理事会で決定する。自然科学分野の研究者数が減っているため、自然科学系の研究者に魅力的な企画が歓迎されている。
  - ・学術誌 KronoScope の編集 年 2 回発行 これまで 14 冊刊行
  - ・シリーズ Study of Time の編集
  - ・メーリングリスト ISST-D
  - ・ワークショップ等の主催
- ### ④ISST のウェブサイトの紹介
- ・ホームページ <http://www.studyoftime.org/>
  - ・学会誌 KronoScope <http://www.kronoscope.net/default.aspx>

## 3. 日本時間学会の活動について、一川誠会長より説明があった。

日本時間学会は「時間」というテーマで発表の場を設けており、学際的研究に

意欲がある人はリピーターになっている。会員は文理融合の幅広い分野の研究者が在籍し、専門分野以外の知見が得られることも会の大きな魅力。発表メンバーが固定化しないように配慮しつつ新規会員の獲得にも力を入れている。特に若手研究者を対象に、学会活動への参加や会誌での論文掲載の意義を感じられるよう、研究水準の向上の重要性が指摘された。

4. 山口大学時間学研究所の活動について、藤沢健太所長より説明があった。研究所には理系・文系また専門も全く違った研究者が在籍しており、「時間学研究」を活発に行っている。研究所創立 16 年を迎え、「時間学」がひとつの学問として認められることがこれからの大きな使命であるが、そのひとつとして「時間学」を構築するためのシリーズ本の書籍出版を進めており、「時間学の構築 I 災害と時間」を刊行した。次号は現在、「物語の時間」というタイトルで編集作業が進んでいる。学問の方法論、問題提起のあり方、理系と文系の壁をどう超えるかなど、今後の課題について意見を出し合った。

5. 今後の国際連携について

今後、3 団体による情報のコミュニケーション、お互いのアウトプット・情報共有、ワークショップの共催などが提案された。また、長谷川理事から、日本での開催は視野に入れていないかとの質問があった。シュタイネック会長から、次回開催地は目下検討中ではあるが、3 年後の国際時間学会大会（2019 年）には、日本時間学会・山口大学時間学研究所が共同してパネル・特別企画セッションへ参加してほしいとの要望があった。そのステップを踏んで、2022 年の大会は日本で行う可能性もあるとし、日本側も前向きに検討したいとした。国際時間学会としても、日本時間学会と時間学研究所の参加によって、自然科学研究者にも魅力的な大会になると歓迎された。

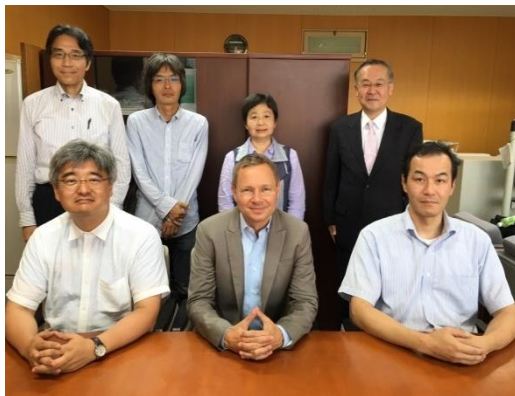
今後、日本時間学会のメンバーが ISST に参加する際の入会審査を省き、会費の割引なども考えている等、具体的な話にも及んだ。現在、ISST の中に日本研究者が増えてきていることから、国際的な学術協力の成果が出やすいこと（具体的には論文が通りやすい）ことなども補足された。

また、シュタイネック会長から国際時間学会の学会誌 **KronoScope** で日本時間学会と時間学研究所を紹介し、さらにニュースレターで「時間学の構築」などの **Book Review** をするのはどうかと提案があった。これにより日本の「時間学」を世界中に知らしめることが出来ると考えられるので、一川・藤沢両氏も前向きに検討することを承諾した。

今後の国際連携に弾みがつき、実りのある協議が出来たことを確認して、第 1 回時間学国際連携会議は成功裏に閉会した。 (文責 平田)

(追記)

会議終了後、シュタイネック会長を囲んで懇親会を催した。会場は小山理事の案内で工織大近くの居酒屋「酒肴座」(しゅこうざ)にて、京都の御番采に舌鼓をうちながら、和やかに研究談義に花を咲かせた。日本時間学会からお礼としてシュタイネック会長へ「瀬祭(純米大吟醸磨き二割三分)」を贈呈した。



シュタイネック会長を囲んで

後列左より細井・右田・小山・長谷川各氏  
前列左より一川・シュタイネック・藤沢各氏



Review 発表をする小山理事

研究所の説明をする藤沢所長



「瀬祭」を贈呈する一川会長

